

# 過去を見つめ、今後を考える平和教育

## 1 対象学年 中学2年生

## 2 生徒の実態

全生徒を対象に、6月9日に事前アンケートを実施した。アンケート結果から、学級の実態が浮かび上がってきた。

本学級の87%の生徒は、日常生活を平和だと実感している。しかしながら「日本が平和」と感じている生徒は学級の50%しかいない。また「世界が平和」と感じている生徒は0%だとわかった(図1)。その理由として、諸外国での内戦や紛争、北朝鮮のミサイル問題、いじめや殺人事件などの問題が挙げられた。

中学2年生ともなると、世界の情勢に目を向けるようになり、ニュースや商業誌等で情報を入手しており、世の中に関心が高い生徒も多い。しかし、アンケート結果を見ると、日本の過去についてあまり関心がなく、戦争について詳しいことを知らないという結果になった。

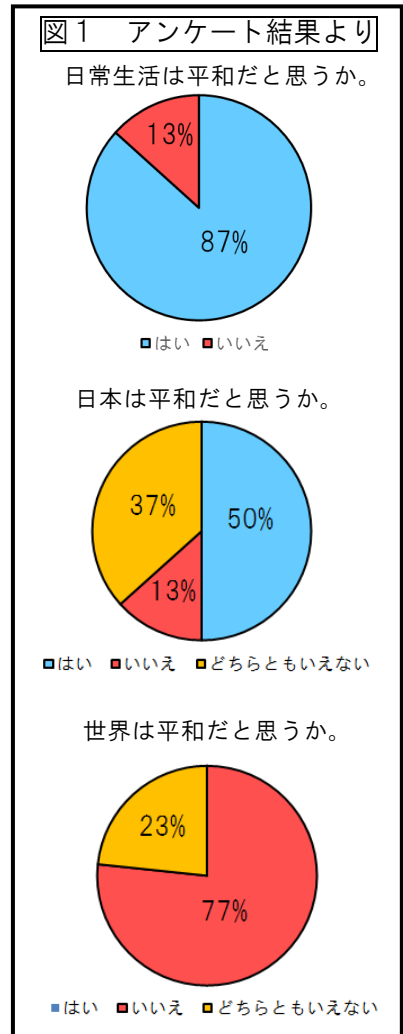
すべての生徒が平和な世の中を願っているのに対し、現状は異なる。平和な世の中を求めているものの、何をしてよいかわからない生徒が多くいる。また、実際に行動してみようとする実践意欲の高い生徒は少ないのが現状である。

## 3 ねらい

世界中の人々は戦争や紛争がなく、安全・安心で平和な暮らしを希求している。今日の世界は核兵器のない平和な世界を築こうとしているが、テロによる事件や地域紛争のニュースは絶えることがない。各国が自国の利益を優先し、国際協調が危ぶまれるような緊迫した場面もいまだ残っている。日本は唯一の被爆国として、平和を訴え、平和を築くことが責務となっている。

戦後72年を迎えた今日、直接的戦争体験、戦場体験者が減少し、戦争の悲惨さや平和の大切さを後世に語り継ぐことが難しくなっている。そのような中、学校における平和教育の重要性は非常に大きいと考える。平和教育は、子どもたちが先人たちの思いを受け継ぎ、未来への希望をもって平和な世界を展望し、その実現のためにどうすればよいのか主体的に考える機会として、大きな役割を担っている。

そこで、本実践では、「焼け跡に立つ虹」の一部を資料として取り扱い、身近な場所で起こった戦争当時の悲惨な様子を『知る活動』と、語り継ぎべの話を聞く『深める活動』、そして、はがき新聞を通して平和の大切さを『広める活動』の三つを柱として、実践を進めることとした。これらの活動を通して、目の前の子供たちに、命の大切さや平和の尊さをより実感的にとらえさせるとともに、相手を思いやることのできる気持ちを高めさせたい。さらには、戦争体験者の切実な思いを真に受け止め、平和な世の中を求めて、何ができるのかを自ら考え、行動に移すことができる実践力を育成したいと考えた。



## 4 指導の流れ

### (1) 準備

#### ① 読み物資料「焼け跡に立つ虹」

**読み物資料1** 「おばあちゃんの戦争体験」「銃後の苦しかった生活」から独自資料を作成

- 戦争を知らない子どもたちに、戦時下のくらしがイメージできるよう、2つの資料をまとめた。身近な生活を取り上げることで、戦時中の生活の様子を理解させ、平和の大切さを実感させる。

**読み物資料2** 「勤労働員の思い出」一部抜粋 ※ はがき新聞の掲示物内に使用する。

- 戦争体験者が、今を生きる私たちに切実な願いを語っている文章である。平和についてさらに深く考えさせるとともに、この文章から多くのことを感じ取らせ、今後の生き方について考えさせたい。

#### ② ゲストティーチャー

中村 桂子氏（元日本兵の故・日比野 勝廣氏の三女）

【愛知県稲沢市在住・元小学校教員】

沖縄戦を戦った中村氏の父、日比野勝広氏は09年に85歳で死去した。翌年から『語り継ぎべ』として、父から聞いた体験や父が残した思い、言葉を語り継いでいる。

これまで「あなたに伝えたい戦争の悲惨さと平和の大切さ」というテーマで、戦争体験を語り継ぐ活動を積極的に行っている。



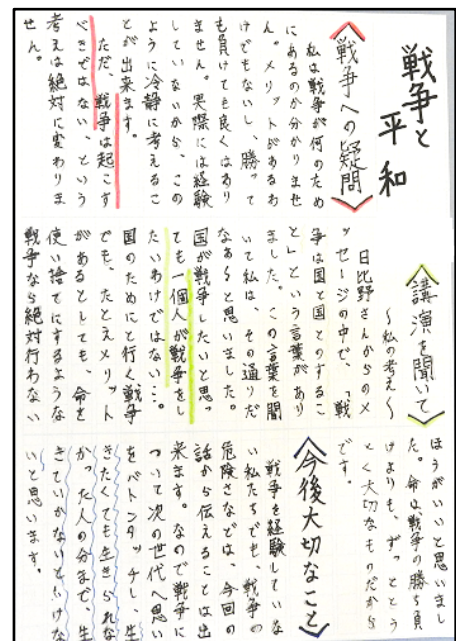
#### ③ はがき新聞

はがき新聞とは、「公益財団法人 理想教育財団」が発行するはがきサイズやそれより少し大きなサイズの、新聞形式の原稿用紙である。

〈はがき新聞の特性〉

- ① サイズがコンパクトなので、タイムリーかつ短時間に取り組める。
- ② 文章だけでなく、絵でも表現できる。
- ③ 無理なく、自然に個性が表現できる。
- ④ 自分の考えを端的にまとめて書くため、要約力が育つ。
- ⑤ 容易に壁新聞を作成できる。

※ 教科の授業で、はがき新聞を用いたレポート制作を取り入れている。



(2) 指導計画 (3時間完了)

第1時

時間	学習活動	形資	指導上の留意点
15分	1 事前アンケートのデータをもとに、学級の実態を知る。	斉 パソコン	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 事前アンケートの結果をもとに平和に関する生徒の意識を浮き彫りにし、意識の低さを実感させる。</li> <li>○ 日本の過去に関するクイズを数問出題し、学級の実態をとらえる。</li> <li>○ 平和な世界を願うには、まず一人ひとりが過去を知ることが何よりも大事だととらえさせる。</li> </ul>
8分	2 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">読み物資料1</span> を読み、当時の様子を知る。	斉 読み物資料1	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 読み物資料1の範読を、現在の生活と比較しながら聞くように声かけをする。</li> <li>○ 戦時下のくらしがリアルに伝わるよう、当時の写真を提示する。</li> <li>○ 校長室前に掲示してある「世界の戦争と人間展」についても触れる。</li> </ul>
15分	3 現在の生活と比較しながら、感じたことや考えたことをまとめ、話し合う。	個 ↓ 斉 プリント	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 落ち着いた雰囲気の中、率直な思いを書かせる。その後、学級全体で友達のを考えを共有させる。</li> <li>○ 生徒の思いを学級通信で紹介をし、他者の考えに触れる機会を作る。</li> </ul>
7分	4 戦時中の生活や様子で、さらに知りたいことをまとめる。	個 プリント	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ クイズや資料1を通して、日本の過去を知り、さらに知りたくなった事柄をまとめさせる。</li> </ul>
3分	5 本時の振り返りをする。	個	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 授業を終えて、今の気持ちを振り返らせる。</li> </ul>
2分	6 次時は、ゲストティーチャーの話を知ることを知る。	斉	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 次時の紹介をし、生徒の気持ちを高めさせる。</li> <li>○ 実際に戦争を体験した人の家族の話を知る機会を設けることで、生徒に戦争の悲惨さを肌で感じさせ、自他の生命を尊重する態度や、思いやりの言動がとれるようにする。</li> </ul>

第2時

時間	学習活動	形資	指導上の留意点
2分	1 ゲストティーチャーを知る。  【中村桂子氏について】 ○ 稲沢市在住 ○ 元小学校教諭 ○ 元日本兵（日比野勝廣氏）の娘（三女）	斉	○ 担任が、ゲストティーチャーを紹介する。 ○ 直接話ができる機会を有効に活用できるように声かけをし、積極的に学ぼうとする気持ちを高めさせる。
35分	2 ゲストティーチャーの話聞く。  演題 『あなたに伝えたい戦争の悲惨さと平和の大切さ』	斉 パソコン PJ スクリーン	○ ゲストティーチャーの講演「戦争の悲惨さと平和の大切さ」から、二度と戦争を起こしてはいけないという思いをもたせるとともに、生命の大切さを実感させ、生命を大切にしようとする心を育てる。
8分	3 ゲストティーチャーに質問をする。	斉	○ 講演を聞いて気になったことや、疑問に思ったこと、前時に書いた詳しく知りたい内容を発表させる。 ○ 時間があれば、講演を聞いた感想を数名発表させる。
5分	4 ゲストティーチャーの講演を聞いて、感じたことや考えたことをまとめる。	個 プリント	○ 生徒が書いた感想を、後日ゲストティーチャーに送る。

第3時

時間	学習活動	形資	指導上の留意点
5分	1 前時までの振り返りをする。	斉 プリント	○ 前時の講演を聞いた後の感想をいくつか紹介し、他者の考えに触れさせる。 ○ 落ち着いた雰囲気の中書けるよう、声かけをする。
40分	2 はがき新聞の構成を考え、「平和」に関する自分なりの考えをまとめる。	個	○ 学んだことや感想にとどまることなく、今後の生活に向けての思いや決意も書くよう促す。
5分	3 「平和」について、自分の考えを発表する。	斉 PJ スクリーン	○ 数名の生徒に、はがき新聞を提示しながら発表させる。 ○ 全員のはがき新聞を掲示物としてまとめ、廊下に掲示することで、学年全体に情報を発信し、平和への意識高揚を図る。

## 5 実践のまとめ

### 【第1時】知る活動

授業の導入で、戦時中に関するクイズを6問出題した(写真1)。参加型のクイズ形式であったため、生徒たちは興味をもってクイズに答える様子から、自然に平和に関する学習に入ることができたと考える。クイズでは、戦時中の様子を世界から日本、原爆が投下された広島と長崎、そして愛知県という流れで構成したことで、より身近な出来事としてとらえさせることができた。生徒から「原爆についてはニュースや新聞で見たことがあるから知っていたけど、まさか愛知県でも同じように爆弾が落とされたなんて知らなかった」「戦争について知っているようで知らないことが多いな」などの声が聞かれた。クイズを終えたとき、ほとんどの生徒が知識の乏しさを感じているようだった。



写真1 クイズを行う様子

次に、身近なところで戦争を体験した人の話「焼け跡に立つ虹」を範読し、当時の様子をより詳しく知る機会を設けた。教師が範読している間、生徒たちは話に真剣に聞き入り、教室内に静けさが漂った。この資料を活用したことで、戦時中の様子をよく理解していない生徒も容易に理解することにつながったと考える。授業を終えての感想から、生徒たちは戦争の悲惨さを痛切に感じているとともに、知識をさらに身に付ける必要があると感じていることが読み取れる(資料1)。

- 戦争は本当に怖いと思った。命が粗末に扱われたり、食べ物がなくて飢え死にしたりと、今では想像できないほど辛い生活を送っていたことを知り、戦争はあってはならないと思った。
- 戦争の悲惨さについて学ぶことができてよかった。もっと日本の歴史を調べて、何があったのか知っていききたいなと思った。
- 二度と戦争をしてはいけない。戦争のまだほんの一部しか知らないなので、もっと知る必要があると思った。直接、当時の話を聞いてみたいと思った。

資料1 学習プリントに書いた生徒の感想

### 【第2時】深める活動

直接的戦争体験、戦場体験者が減少している中、戦争の悲惨さや平和の大切さを後世に語り継ぐことは難しくなっている。しかし、過去の出来事を風化させてはいけないため、さまざまな方法で語り継いでいかなければならないと考える。そこで、今回は戦争を体験した父の話を語り継ぐ「語り継ぎべ」である中村桂子氏をお招きし『あなたに伝えたい戦争の悲惨さと平和の大切さ』と題して、講演をしていただいた。本校においても平和教育を推進していこうと考え、この講演を学年全員で聞くことにした(写真2)。

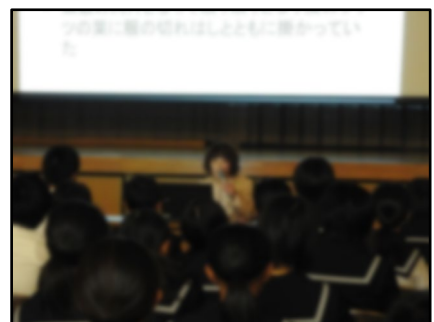


写真2 講演をする中村桂子氏

本学級の生徒たちは、前時に戦時中の生活の様子を知り、さらに詳しく知りたいという気持ちで語り継ぎべの話真剣に聞いた。体験者の話を聞いたり、写真で戦時中の様子を見たりしたとき、目の色を変えて話を聞く子どもの姿が見て取れた。中村氏が、講演の最後に「普段の何気ない言動から平和について考えてほしい」「命を大切にし、自分の夢や希望にむかって努力をすることが、戦争で亡くなった人を報いることだ」と、



写真3 講演の感想を書く様子



子どもたちに訴える姿が印象的だった。直接体験者の話を聞く機会を設けることは、平和の大切さや戦争の悲惨さを深く考えさせるのに効果があったと考える。生徒の感想からもわかるように、これまでの考えをさらに深化させることにつながったり、自分の生活に結び付けて考えたりすることができたといえる（前ページ写真3、資料2）。

- 戦争のことはある程度知っていたつもりだったけど、今回の話でより深く、戦争の悲惨さや平和の大切さを知ることができた。実際に体験した人の話を聞くと、心にくるものがあった。今後、自分たちが次の世代へしっかりとバトンタッチをしないといけないと思った。
- 戦時中に生きていた人たちも、きっとやりたいことが多くあったと思う。自分たちは今、平和な時代に生きていて、やりたいことができるので、あきらめることなく、自分のやりたいことを一つずつしっかりやっていきたい。
- 講演を聞いて、改めて戦争の恐ろしさや平和の大切さを学ぶことができてよかった。今のこの幸せな生活に感謝をし、自分の命を大切にしていきたいと強く感じた。また、戦争の恐ろしさを次の世代へしっかりと伝えていきたいと思った。

資料2 学習プリントに書いた生徒の感想

【第3時】広める活動

はがき新聞を書く前に、これまでの学習を振り返るために、講演で印象に残っている話や言葉などを自由に発表させた。生徒たちは戦争の悲惨さや平和の大切さ、当たり前の生活への感謝など、一人ひとりが自分の思いを熱く語った。それに続いて、教師はある生徒の生活日記に書かれた言葉を紹介した（資料3）。

「あなたが夢や希望を実現することで戦争で亡くなった人達の無念が少しでも晴らされる」  
一番印象に残った言葉。

資料3 子どもの生活日記より

その後、落ち着いた雰囲気の中、生徒たちは自分なりの思いを巡らせながら、はがき新聞を書いた。はがき新聞には、授業を通して学んだことや感じたこと、今後の生活に向けての決意等をまとめた（写真4）。

完成したはがき新聞を一つの掲示物としてまとめ、学年の廊下に掲示をした（写真5）。学年の廊下に掲示をしたことで、他のクラスの生徒が興味を示し、新聞を読む様子が多く見られた。また、より多くの生徒にとって、戦争の悲惨さや平和の大切さを考えるきっかけになったと考える。今後は、他学年の生徒が通る廊下に場所を変えて掲示をしたり、ゲストティーチャーと連携して民間施設等に掲示をしたりして、平和教育の取り組みを広げていきたい。



写真4 はがき新聞の例



写真5 学年廊下に貼った掲示物

## 6 成果と課題

### 【成果】

読み物資料「焼け跡に立つ虹」は、戦時中の様子を知るのに効果があったと肯定的に回答した生徒は、全体の約93%を占めた(図2)。また、ゲストティーチャーの「語り継ぎべ」中村桂子氏の講演を通して、命の尊さや平和の大切さなどを考えることができた子どもは、全体の約96%を占めた(図2)。

実践後、友達の書いたはがき新聞を読む姿や、他クラスの生徒と掲示物を見ながら平和について話す姿が見られた。以上のことから、本実践の成果を以下にまとめた。

- 知る活動として読み物資料「焼け跡に立つ虹」を使用することは、過去についてあまり知らない子どもにとって、戦時中の生活の様子を知るのに効果があった。
- 深める活動である「語り継ぎべ」中村桂子氏による講演は、多くの子どもの心を刺激し、平和の大切さや戦争の悲惨さを深く考えさせたり、今後の生活への決意をもたせたりするのに有効であった。
- 広める活動としての「はがき新聞」の活用は、他者の思いに触れる機会を提供でき、平和について考えたり、今後の生活で実践していこうとする思いをもたせたりするのに有効であった。

### 【課題】

- 今回行ったような平和教育を、今後どのような形で教育活動の中に入れていくかを検討する余地がある。
- この学びを実生活に生かすことができるよう、支援をしていく必要がある。

## 7 実践を終えて

本実践では『知る活動』『深める活動』『広める活動』の3つの柱を意図的・計画的に設定し、生徒とともに平和について真剣に考えることができた。多くの生徒は、戦争体験者の切実な思いを受け止め、限りある命を大切に、夢や希望に向かって努力していこうとする気持ちを高めることができた。

今回取り上げた内容は、戦争の一部にしか過ぎない。さらに過去を深く知り、本実践を通して芽生えた平和への意識をさらに広げていくことが必要である。今後も、平和について考える機会を作り、平和実践を継続して行っていきたい。

